明治神宮の本殿境内を囲んでいる神聖な杜は、自然林に見えるかもしれませんが、実際のところ、それは明治天皇と昭憲皇太后を称えて、11万人のボランティアの手作業により、植樹されたものです。70ヘクタールの敷地内には現在、日本各地から奉納された234種もの異なる品種の木があります。これらはすべて、100年後、200年後にどのように育っていくかを想定して選ばれた一方、1920年の植樹直時も自然な景色となるよう配慮がなされました。このプロジェクトは本多静六博士(1866年～1952年)が率いたもので、同博士は日比谷公園の設計案も担当した人物です。

神聖な杜とされているために、誕生以来ここは人による介入は行われておりません。加えられたものも除かれたものもなく、植物は自然のまま保たれなければなりません。倒れた木々は土に還るようにそのまま放置されています。静かな杜を歩けば、季節を問わず異なる新しい何かに出会えるでしょう。その境界は同時に、聖域と世俗の間の垣根としても機能しています。ここは、東京で最も象徴的な緑地の一つと見なされている場所です。